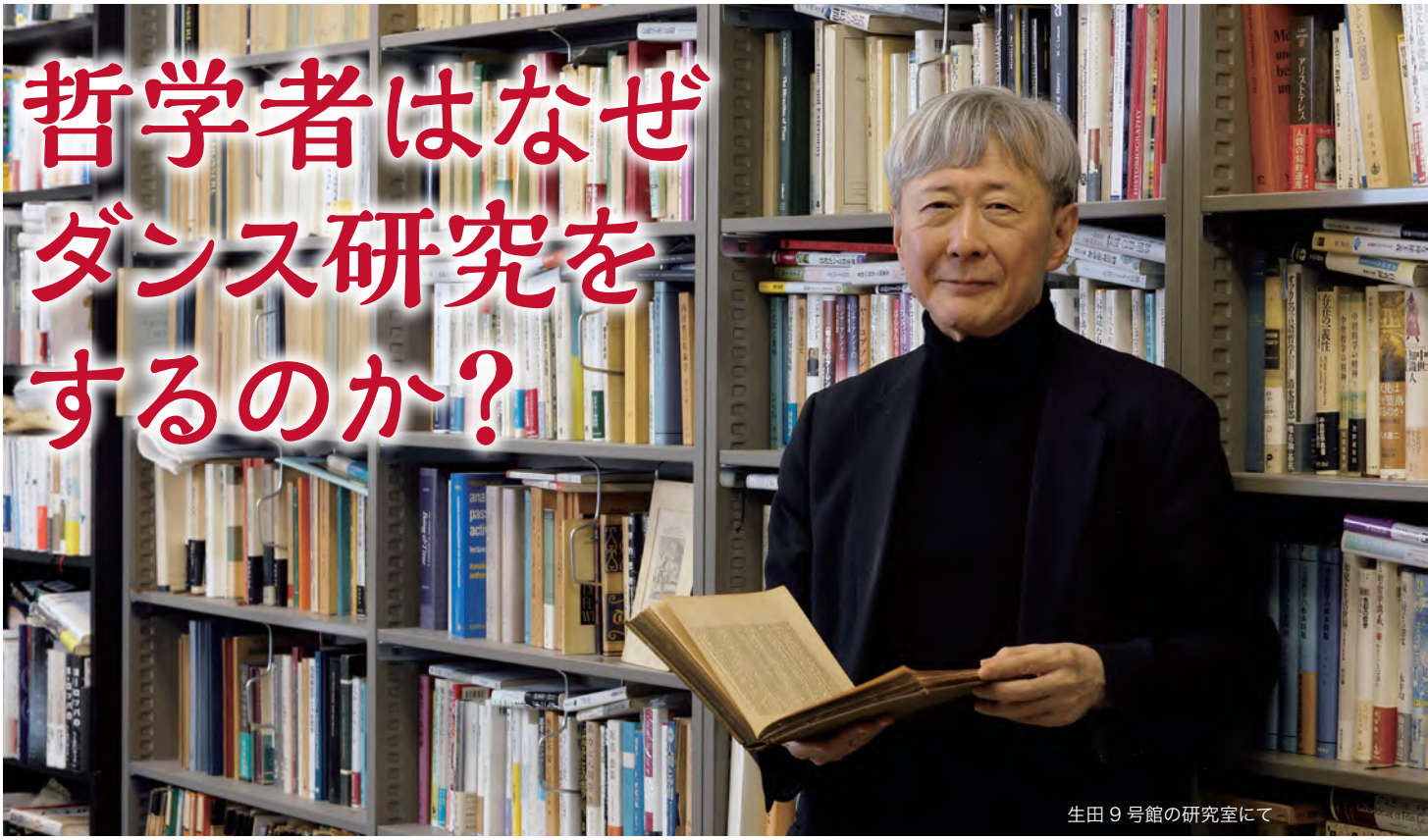
哲学者はなぜダンス研究をするのか？



生田９号館の研究室にて

文学部教授　貫 成人

ぬき　しげと

神奈川県鎌倉市生まれ。東京大学大学院人文科学研究科哲学専修博士課程単位取得満期退学。博士（文学、東北大学）。主著に『経験の構造：フッサール現象学の新しい全体像』『歴史の哲学：物語を超えて』（勁草書房）、『哲学マップ』（ちくま新書）、『バレエとダンスの歴史：欧米劇場舞踊史』（共著、平凡社）など。『ダンスマガジン』などに舞踊批評執筆。

哲学科教員である私には、裏の顔があります。踊り、それも「コンテンポラリーダンス」にはまり、劇場に足繁く通い、その授業も開講しているのです。

哲学研究といえば、「人生どうあるべきか」「真理とは何か」など、お堅いテーマを前に呻吟（しんぎん）し、世の常識をもっともらしく批判するのが普通です。運動といっても散歩くらいが関の山。ベートーヴェンやブラームスに聞き入ることはあっても、踊りには縁遠い存在です。

その哲学教員がダンス好きと聞くと、だれもが驚きます。とはいえ、安心してください。自分では踊りません。研究だけです。しかし、その研究で文部科学省から大枚の研究助成を頂いています。「科学研究費」という、みなさまの税金を原資とする助成金です。これはいったいどういうことなのでしょう。

ダンスとの出会い

事の発端は30歳の時でした。大学院は修了したものの就職先がなく、途方に暮れていたところ、運良く留学の奨学金を頂くことになったのです。留学先は、当時の西ドイツ、ヴッパタール市という無名の都市でした。1986年のことです。本当に貧しく小さく、名所も何もない町でしたが、そこで何気なく見たダンスに、まるで波動砲のような衝撃を受けたのがはじまりでした。それまで、哲学という観念的な世界に生きていた私にとって、はじめて生々しい「リアル」を突きつけられたように感じたのです。それ以来、ダンスの魅力を解き明かすことを自分の使命と任じるようになりました。

とはいえ、音楽などに比べ、ダンスは圧倒的に無名です。音楽ならモーツァルトやベートーヴェン、美術だったらゴッホやピカソ、文学といえば紫式部や川端康成など、各分野に誰もが知る偉人がいます。ダンサーやダンス作家の名を知る人は皆無です。

私たちとダンス

しかし、だからといって踊りが私たちに縁遠いものかというと、そんなことはありません。しばらく前まで都心でも、夏になると毎週のように辻々で盆踊

↑ドイツ、ヴッパタール市、オペラハウス

↑コンドルズ

り大会がありました。阿波踊りやよさこいソーランはいまでも盛んです。マイケル・ジャクソンや「嵐」、「AKB48」、古くは「モーニング娘。」、さらに「ピンク・レディー」など、一度も見たことのない人はいないでしょう。YouTube、TikTok などには素人によるダンス映像が溢れています。バレエや日本舞踊のお稽古に通った方も少なくありません。ダンス界にベートーヴェンやピカソはいなくても、世界は無名のダンスで溢れています。

それどころか、歴史を紐解けばさまざまな場面で踊りは重要な役割を果たしました。織田信長が出陣の際、「人間五十年 下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり」と、自ら舞ったことはよく知られています。ヨーロッパに目を転じれば、歴代最強のフランス王「太陽王」ルイ 14 世は優れたダンサーでした。ヴェルサイユ宮殿では宮廷人たちを前に、ルイ自身が主人公となって、偉大な国王である自分を賛美するバレエ作品を上演したのです。

日本やヨーロッパで、その後、歌舞伎舞踊やバレエ、モダンダンスなどさまざまな踊りが生まれました。その最先端に位置するのが「コンテンポラリーダンス」です。

コンテンポラリーダンスの魅力とは?

その魅力のひとつは、意表をついた笑いと迫力のダンスの合間に、見ている者の心の襞(ひだ)を擽(くすぐ)り、感情を動かす工夫にあります。

ヴッパタールで日本人学生に衝撃を与えたのは、ピナ・バウシュという作家でした。従来のダンスにも演劇にもなかった独特の手法によって世界を震撼させ、「コンテンポラリーダンス」というジャンルそのものをつくった人物です。何度も来日し、日本にも多くのファンがいます。

彼女の作品にはたとえば次のようなシーンがありました。

誰もいない暗い舞台。小柄な中年女性が古びた椅子を引きずって現れます。質素な普段着で椅子に腰掛けると 100 円ライターを取り出し、点火します。そしてやおら、「ハッピー・バースデー・ツー・ミー、ワン」と歌い、火を吹き消すのです。戸惑う観客をよそに、彼女はふたたび火をつけ、「ハッピー・バースデー・ツー・ミー、ツー」と歌って、また吹き消します。同じ所作は歌詞の最後を「スリー、フォー」と変えながら続きます。自分の誕生祝いだったのです。

観客は意表をつかれて笑ってしまいます。しかし、笑いながらも胸の底にモヤモヤしたものが湧いてきます。洋の東西を問わず誕生日は、ご馳走やケーキを用意し、家族や友人と祝うものです。ところが、彼女はたった一人、ケーキもプレゼントもロウソクすらもありません。安っぽいライターを年齢の分、着火し、吹き消す。孤独そのものです。しかし、誕生日や正月などを一人過ごさなければならなかった体験は、だれにでもあるでしょう。観客は笑いながらも、過去の記憶が蘇り、痛みを覚えます。“人間だれもが、基本、孤独”という真実に観客は気づくのです。

日本には「コンドルズ」という、「学ラン」をトレードマークとする男性だけのカンパニーがあります。最近作は「老い」をテーマとしました。老人役のメンバーが「おでこにかけた老眼鏡を忘れる」「トイレを出るなり股間を見下ろして舌打ちする」など、「老人あるある」で笑いをとり、小粋なダンスで心を掴む。テンポのいい展開のなか、ある老人が言った「年は取るものではなく、頂くものだ」という言葉が披露されます。加齢をポジティブにとらえる視線に、観客の肩の力は思わず抜けるでしょう。

コンテンポラリーダンスは、愉しい笑いのうちに、人間の真実を突きつけ、世の常識を崩します。思えば哲学もまた、世の常識を打ち破り、人間の真の姿を示すものでした。コンテンポラリーダンスは柔らかな哲学と言えるかもしれません。

科学研究費の助成でこの 3 月、我々の研究チームはウズベキスタン調査を行います。中央アジアの中でも踊りが盛んなところです。日本やドイツとは異なる芸能に触れることによって、哲学の見直しにも繋がる予感がします。この冊子がお手元に届く頃には調査も終わり、この予感が的中していることを期待しています。